

農村開発フィールドワークと援助 — 共感から始まる介入に向けて

小國和子

●はじめに ―五感で学ぶフィールドワーク

人類学の調査方法として誰もが思い浮かべるのが長期的な参与観察中心のフィールドワークだろう。フィールドワークを行う者は、対象社会で生活しながら良い関係を築き、包括的な理解を深めようとしてきた。「相手社会の身体技法に慣れ親しみ、それを学ぶ」ともいわれるように(参考文献⑨)、フィールドワークは調査者の五感を駆使した、とても「体を張った」体験である。

このように全人格的な対話や体験を通じて得られた質的データを扱うにもかかわらず、民族誌では調査者の関与がなかったかのように客観的に描かれることが、人類学内で批判されてきた(参考文献⑥)。現在では、フィールドワークの場で調査者の存在をどう扱いそれをどう描くのかは、人類学全般における課題である。

他者を描くことの力と意味が厳しく論じられる一方で、良好な関係をもとに観察を行う基本が変わったわけではない。また日々の記録から民族誌作成まで、フィール

ドワークが「書く」ことに向かう方法だという事実も受け継がれてきた。これに対し、関根は開発援助における人類学的実践の可能性として「創発的協働」を掲げ、「フィールドワークを通じて支援事業のプロセスを詳細に把握したとしても、必ずしも『書くこと』に帰結するわけではない」と指摘する(参考文献⑧)。以下ではフィールドワークに着目し、カンボジアでの事例を通して、書くこともまた過程であるという立場から開発援助における人類学実践の具体的な提示を試みたい。

●農村開発協力におけるファシリテーションへの期待と実際

農村開発協力では、受益者の主体性を重視しようという傾向が強まり、援助者の役割は、当事者が可能性を発揮する機会を側面から手伝うファシリテーションへと認識が変わってきた。ファシリテーションは「住民には潜在能力がある」という考え方をもとに「住民の主体性を引き出し、計画、実施、合意形成プロセスを機能させる手伝いを行う」とされる(参考文献③)。

この傾向の中で展開してきた参加型開発の議論では、外部者の権威が批判され、援助者と住民の一方的な関係の脱却が模索されてきた(参考文献⑩)。その一環で導入されたPRAのような参加型調査では、対象社会の歴史的な時間軸や生活圏の把握など、社会を包括的に理解する方法がツール化されている。しかし参加者の意識を喚起する学びのプロセスとして期待される参加型調査が、現実には受益者の形ばかりの参加を確認する手段として矮小化されているという批判もある(参考文献④)。

ファシリテーションについて太田は日本の生活改良普及員を例にとり、介入する「普及員が自らの成長を促すことでグループの成長を促す」試みを整理している(参考文献①)。人々が漠然とした問題意識をもつ状態から気づき、行動し、変わっていくプロセスは長期にわたる。普及員のかかわりも「おんぶ」「手をつないで歩く」から「手をはなす」期へと段階的に変化し、双方が相互作用的に経験される。

そうはいっても、短期的な援助で生活改良普及員のような長期的な介入を真似られ

表1 フィールドワークとファシリテーション

	研究目的のフィールドワークにおける問い、聞き取り、身体的な共同作業	援助の枠内で設定されるファシリテーション
行為主体	「調査する」人	外部者を含む「参加する」人
住民の位置づけ	対象化される。	意図的に「主役」に仕立て上げられる。
介入の目的	対象社会の包括的理解。	かかわる個人や集団の変化（意識化、組織化、活性化等を通じた生活向上や安定）。
対象社会での介入役割と責任	基本的に言及されない（実際は関係に応じて様々な役割がある）。	介入行為に対する住民の主観的なプラス評価と、事業枠組みで妥当な住民の変化。
基本的な姿勢	社会に溶け込み、生活を共にし、住民の主観的価値体系を学ぶ。	住民の自発的な意識化や行動を促す（機会の設定含む）。
自身にとっての成果	獲得したデータを用いて民族誌を作成する。	受益社会と援助の枠組み双方から妥当な働きかけを行ったと認められること。
「書かれた」アウトプット	民族誌（度重なる現地調査、資料分析、考察を経てまとめられる）。	活動報告書（記録的、説明責任に基づく事務的な性質をもつ）。

（出所）筆者作成。

は、住民の意識を喚起するきっかけとも捉えられる。では住民が抱える

●フィールドワークの介入性

個人の人生についてのストーリーを通じて社会の特徴を捉えようとするライフヒストリー研究では、データとなる「語り」が聞き手との共同作業で生まれると言われる（参考文献⑤）。この考え方に基けば、開発現象に関心をもつて生活に参与し、問いを投げかけるフィールドワークは、住民の意識を喚起するきっかけとも捉えられる。では住民が抱える

るわけではない。ファシリテーションの実態も、担当者の職人技にかかっているケースが多いようにも思われる。ファシリテーションスキル研修もあるが、その中身の詳細なマニュアル化は、結果的に形式的な実践にむすびつくことが危惧される。太田はファシリテーション研修がワークショップなど特定の「場」における技量や気遣いにとどまっていたことを指摘している。

問題に直面した時に、「聞き手」だったはずの調査者はどう「語り」かかわることができるだろう。

研究目的のフィールドワークを安易に「相手の変化を目的化する」援助介入と同じ土俵に置くつもりはない。しかし時に研究あるいは援助実務と立場が変わりつつ東南アジア農村を訪問する筆者にとってフィールドワークの介入性を検討することは、なによりも対象社会の人々と誠実に向き合うために必要である。たとえば援助者は当然「かかわりが引き起こす変化」に注目するが、調査者は相手を理解することに必死になる。しかし対象社会にとっても「かわり」で何が生まれるかが重要なのではないだろうか。滞在が長期になれば尚更、何らかの役割を期待される可能性は高い。認識が甘ければ、調査者は「お客さん」として情報を得て終わるか、不当と思われる要求（ちょっとした無心など）を拒否したりして、フィールドワークという相互作用を一方的な判断で閉じてしまうことになる。

●手段として／目的としてのかわり

フィールドワークとファシリテーションの外部者性は、目的の点で決定的に異なる。表1で示すように、フィールドワークの目的が対象の理解（そしてそれを書くこと）にあるのに対し、ファシリテーションは対象の変化を目的とする。しかしそれを前提

とした上で、生身の人間の日常的なかわりに注目してほしい。前者は調査者の「書く」行為に帰結するため、対象社会では良好な受入れ関係の保持のみが必要となる。他方、後者は住民に対して「ある変化」を期待するため、常に住民に同調できるわけではない。その点だけみれば、相手に同調し続けられるフィールドワークはファシリテーションとは全く別物だ。

しかし別の見方をすれば、前者は徹底して住民につきまとい、問いを通じてさまざまな意識を喚起させる介入者である。その介入性が表面化しないのは、フィールドワークが「住民を対象化する」行為として認識されているからである。つまり調査者自身が行為主体であって、自分とのかかわりで人々がどう変わるかは必ずしも言及されない。いわば、かかわりの行為は「書く」ために手段化されるわけである。

●「かかわるべきか」から「いかにかかわっていくか」へ

かつて筆者は、「相手に学ぶフィールドワーク」と「相手を変えようと乗り込む援助」が全くかけはなれた行為だという姿勢でインドネシアの農村開発に関わった。事業に無関係と思われる日常の出来事に関心を持って観察することを自らに課し、信頼関係の構築に努め、日々のメモなど「書く」ことに励み、「援助者の自分」を含む記録を試みた。村に住んで生活を共にし、家族

の一員のような立場を得て、その関係に基づいて問いを重ねる中で気づいたことがある。

まず、援助者であれ研究者であれ、信頼を基盤にものが成り立つ点では大差ない。そしてどの立場であれ「わたし」が対象社会に影響を与え得るよそ者であることに変わりはない。むしろ「問い、語りかける他者」というよそ性が対象社会との相互作用性を高め、変化因子になると感じた。

また東南アジアの農村は、短期的な援助の有無にかかわらず否応なしに変化を遂げていることを実感した。そこで、さまざまな他者を含んで変化を遂げる動態的な農村社会を捉えたい思いが強まった。これが、援助介入を包む視点でフィールドワークの可能性を考えるきっかけとなった。

●エントリー活動―日常につながるフィールドワークの創出

筆者は二〇〇三年から約二年半、カンボジアで技術協力に携わった。対象地域は北西部の都市バタンバン近郊農村で、事業期間は三年間である。目標は農業生産性の向上と農家生活の安定であり、筆者は農民組織分野の担当として、水利組合や女性中心の食品加工活動などの支援を行った。

これまでに筆者は、長期的な農村開発にむけて短期の援助のできるアプローチとして、事業を「学びの場の創出機会」と捉えようと提案し、事例としてエントリー活動

を紹介した(参考文献②)。エントリー活動とは、住民自身も実感したいポテンシャルを探り、経験的なニーズを顕在化して自発的かつ持続可能な活動を模索するプロセスである。カンボジアでは、小規模で簡単な食品加工の会を重ね、必要な技術を身につけたり、リーダーシップ発揮を促したりという展開がみられた。

エントリー活動では内容を固定化せず、集まり自体を重視して、実習は一回で完結することが初期の原則だった。参加者自らが会合を計画し、もちよりで実習を行う。援助側にとっては聞き取りやアンケートなど「問いを発する」場となった。事業に直結することだけでなく、普段の生活や社会関係への観察眼を重視した。事業終了後も「援助者」として働く公務員が住民から学び、問う姿勢や語りを受けとめる技術の蓄積を目指した。これは筆者がフィールドワークを通じて身につけてきた姿勢と関係の作り方である。筆者はこれを、エントリー活動という企画を通じてファシリテーション技術の一環として位置づけ、指導を行った。

●共感の先に変化がみえてくる

しかし、援助ツールとして「フィールドワークが使える」わけではない。フィールドワークの基本は、ありのままの社会を全身で受けとめる姿勢にある。それは「相手の変化」を前提とする援助のロジックと矛盾する。またフィールドワークでは、対象

社会に溶けこもうとする姿勢で現地語を学び、体験を通じて理解を深める。そして、日常的な対話や経験の共有に基づく関係の中で語りに耳を傾け、問いを投げかける。ここでの「問い」はいわば日常生活に埋め込まれた問いであり、大抵はその時々に関き手と語り手の間で共有される行為と関連している。だから答える側も無理がなく、問う側も答えが発せられた個別の社会的な文脈に位置づけて解釈しようと努める。それは、五感を通して調査者が獲得する相手社会への共感があつてこそ成りたつ。

この点でいえば、エントリー活動は援助の枠内で創出された「場」であり、太田の言う「ワークショップのファシリテーション」とさほど違いはない。ただ、技術研修を、援助者を含めた学びの場と設定すること、研修での行為をより広く生活に結びつけて問い、語りが生まれることを期待した。その一つの特徴が、聞き手と語り手の身体的な行為の共有にある。たとえばパイヤの砂糖漬けの過程では、パイヤの値段や栽培量に関する単純な問いに端を発した語りが、家族の労働分配や市場との関係、出稼ぎ先の息子からの仕送りへの依存や新しい土地購入への意欲など、地域の生活と開発を理解する上で貴重な語りへと発展していく。「相手の変化を意図するファシリテーション」の場ゆえに、聞き手は情報を持ち帰るだけでなく、希望の実現や問題解決に向けて対話を進める。この空間にお



開発援助と人類学

いて聞き手と語り手は固定化されていない。ファシリテーターである聞き手も、時には雄弁に自らの生活を語る。そうした語りの中で相互理解を深めていく。

●おわりに

事業が終了して約一年経った二〇〇七年一月、筆者は対象農村を訪ねて聞き取りを行った。一年前まで援助関係者だった筆者に対して、アドバイスを期待して現状が語られることも多い。筆者はそれらに対して自分の立場を明らかにしながらできる限りの意見を述べることにしている。

また現在、筆者がフィールドワーク論を教える大学院では、援助にかかわる実務家が、自分の経験を研究として取り上げる例が比較的多い。かつての筆者同様「援助者として見られたら偏った情報しか得られない」と悩む者もいる。彼らとの議論を通じて感じたことは、五感を通じて相手に学ぶフィールドワークをよそ者介入の姿勢と視点形成プロセスとして行うことが、自らを含む援助の枠組みを一時的に（あるいは仮想的に）乗り越えて社会を見る目を養う機会となるかもしれないという期待である。皮肉なことに、援助者としてのバイアスから自由になろうと行うフィールドワークでは、結局「援助者の私に対して受益者であるとする対象社会」との限られた関係と、それを規定する援助の枠組みを再認識させられる。しかし現在の農村開発援助は

住民の意思決定と行動の機会を創出することであり、よそ者の役割は側面支援たるべきという方向性をもつ。そうであれば、包括的な理解を目的とし、体験を通じて「共感を覚えた」結果、他者に変化を及ぼしたり開発現象の創り手となっていくようなかわりは、介入を前提に住民の主体性にこだわる援助介入の姿勢に対して大切なヒントをくれるのではないだろうか。

他方、介入としてのフィールドワークの検討は、開発援助に関心を持つ人類学者にとつても興味深い。関根が「援助の文化を学ぶ必要性」を指摘するように（参考文献⑦）、人類学内部で完結する専門的な語りは、いまいちど援助実践の日常的なレベルに翻訳しなおす作業が求められる。これに対して開発援助の責任の一端を担うフィールドワークでは、援助の枠組みの中で相手の生活世界を中心に置いた考察が求められる。その作業において重要なのは、自らを相対化して、さまざまな思惑を抱く関係者とゆるやかに結びつく調査者自身の介入性と役割を認識することである。関根が指摘する「つなぐ」行為を視野に入れた対話とは、調査者自身がその存在をもって変化因子となり、問いを通じて気付きを促す可能性の実践ともいえるのではないだろうか。

（おぐに かずこ／日本福祉大学大学院講師）

《参考文献》

- ① 太田美帆『生活改良普及員に学ぶファシリテーターのあり方』国際協力機構、二〇〇四年。
- ② 小國和子『農村生活と開発』青山温子・佐藤寛編『シリーズ国際開発 第三巻 生活と開発』日本評論社、二〇〇五年。
- ③ 国際開発ジャーナル社『国際協力用語集 第三版』国際開発ジャーナル社、二〇〇四年。
- ④ 佐藤寛編『参加型開発の再検討』アジア経済研究所、二〇〇三年。
- ⑤ 桜井厚・小林多寿子編『ライフストーリー・インタビュー』せりか書房、二〇〇五年。
- ⑥ ジェイムス・クリフォード、ジョージ・マーカー編『文化を書く』紀伊国屋書店、一九九六年。
- ⑦ 関根久雄「つなぐー開発実践における人類学の役割」（『民博通信』一二二号、二〇〇六年）。
- ⑧ 関根久雄「対話するフィールド、協働するフィールドー開発援助と人類学の『実践』スタイル」（『文化人類学』七二巻三号、二〇〇七年）。
- ⑨ 田中雅一「ミクロ人類学の課題」田中雅一・松田素三編『ミクロ人類学の実践』世界思想社、二〇〇六年。
- ⑩ チェンバース、ロバート（野田直人他訳）『参加型開発と国際協力ー変わるのはわたしたち』明石書店、二〇〇〇年。